1989年（平成元年）5月18日（木曜日）　国際　総合　13版（6）

識者座談会

十五日から北京を訪問中のゴルバチョフ・ソ連共産党書記長はすでに鄧小平中央軍事委主席ら中国首脳との一連の会談を終え、きょう十七日には、人民大会堂でしめくくりの講演を行いました。この三日間、私たちは新聞やテレビを通じて、歴史の歯車が動く音を身近に聞いた思いがしました。中ソ両社会主義大国の三十年ぶりの和解は、今後の世界、とくにアジアにどのような影響を与えるのか、また日本として、これをどのように受け止めるべきか、国際政治と東西問題に詳しいお三方にお話をうかがいたいと思います。（伊藤光彦東京本社編集局次長の冒頭のあいさつから）

ソ連は正常化ベースに　アジア外交攻勢へ

鹿取氏

鹿取泰衛
国際交流基金理事長

——ゴルバチョフ演説が行われた十七日、天安門広場での学生デモでは「鄧小平、この二日間トランプをしていますか」のプラカードも出た。今回の中ソ会談では中ソどちらのカードがよかったか。

鹿取　今回の会談は、まずソ連が呼びかけ、中国がそれに条件をつけ、ソ連が歩み寄って成立した。会談を通してみると、私は中国側が有利な状況にあったと思う。しかし、ゴルバチョフ書記長の訪中のタイミングは悪かった。胡耀邦前総書記の死去によって起きた学生デモと重なり、その学生デモが市民の協力を得て大規模なものになるなど、中国側としては今後難しい問題を抱えることになった。どちらがよかったとも言えない。

中嶋　パワーゲームの中では中ソが対立している時代ではないのでどちらが得をしたか、言えない。今回の会談は歴史的な和解であり、中ソ関係は明確に改善された。一つには国際関係が緊張緩和の方向に動いている中で、それぞれの国が抱えている社会主義の内部問題の比重が重くなった。ゴルバチョフ書記長は、新しい未来の展望に立って今回の会談に臨んだ。一方、鄧小平氏は、一九五六年のスターリン批判以来、中ソ論争にかかわり、とくに六三年の中ソ両党会談では代表者だった。またその後の文化大革命の受難を経てきた人物だけに、過去を清算する気持ちが非常に強かったようだ。会談前にペレストロイカ（立て直し）に鼓吹された中国の学生デモが起き、その中で鄧小平氏の引退を求める声が上がったのは痛烈な歴史の皮肉といえる。中国は内政上、大きな宿題を突きつけられたと思う。

鴨　カードはともかく、今回の中ソ和解は歴史的に重大な意味を持つ。国際政治のダイナミズムというか構造が、米ソ関係の緊張緩和、関係改善を起点にして大きく動いてきている。その文脈の中で中ソ関係の正常化という新しい流れが生まれ、それは中ソ双方の利益にかなうものといえよう。

——過去三十年の対立の時代を経て実現した今回の和解は、どの程度確かなものだろうか。

鹿取　中ソ正常化もアジア・太平洋外交を重視するというソ連の世界政策のグランド・デザインの中で達成された。ソ連はこの正常化をベースとしてアジア・太平洋外交を活発化していくだろう。

鴨　中ソ紛争、対立にはいろんな要因があったが一つには、戦後の冷戦構造の中で西側、例えば米国にどう対応するかという点で、両国に違いがあったと思う。米ソ両国指導者の意思疎通や軍縮・軍備管理の交渉を続けるという新しいレールの中で、中ソ関係改善が行われた。ソ連の内発的な変化がある。ゴルバチョフ書記長が軍縮提案を行ったり、中国の言っていた「三つの障害」を短期間のうちに努力したりという中からの変化が、特に外交戦略面で目立ち始めている。〝ソ連帝国〟というものが伸び切ってしまい失敗の連続、ゴルバチョフ書記長になって現実主義による軌道修正を行わざるをえなくなった。中国にしても、三つの障害のうち中ソ国境で軍事的に対峙（じ）し合っている緊張感、そしてそれに割くコストはかなり大きい。

——両国間のイデオロギー上のけじめは、どのようにつけられたのか。

中嶋　中国は改革を目指し、ソ連もペレストロイカを進めている。すでに古いイデオロギーの時代は終わり、中ソ両党間でもイデオロギー論争はなくなっていた。そういう意味からいえば、今回のセレモニーでけじめをつけたといえるだろう。

鹿取　中ソ関係は経済面などでは八〇年代初めからすでに動き始めており、その延長で今日の正常化につながった。ゴルバチョフ登場以後、その動きがはっきりしてきた。ゴルバチョフ外交はグローバルな視野で行われているが、同時に、社会主義諸国との関係をよくすることを明確にしており、なんとしても中国との関係修復を成し遂げたいと努力してきた。

中嶋　中ソ間のイデオロギー論争はなくなったものの、両国ともイデオロギー国家としての枠組みからは完全にはみ出てはいないと思う。十七日朝のゴルバチョフ演説を聞いても、イデオロギーをよりソフトにしようとしているとは、戦後の冷戦構造の中で西側、例えば米国にどう対応するかという点で、両国に違いがあったと思う。米ソ両国指導者の意思疎通や軍縮・軍備管理の交渉を続けるという新しいレールの中で、中ソ関係改善が行われた。ソ連の内発的な変化がある。ゴルバチョフ書記長が軍縮提案を行ったり、中国の言っていた「三つの障害」を短期間のうちに努力したりという中からの変化が、特に外交戦略面で目立ち始めている。〝ソ連帝国〟というものが伸び切ってしまい失敗の連続、ゴルバチョフ書記長になって現実主義による軌道修正を行わざるをえなくなった。中国にしても、三つの障害のうち中ソ国境で軍事的に対峙（じ）し合っている緊張感、そしてそれに割くコストはかなり大きい。

——両国間のイデオロギー上のけじめは、どのようにつけられたのか。

中嶋　中国は改革を目指し、ソ連もペレストロイカを進めている。すでに古いイデオロギーの時代は終わり、中ソ両党間でもイデオロギー論争はなくなっていた。そういう意味からいえば、今回のセレモニーでけじめをつけたといえるだろう。

鹿取　中ソ関係は経済面などでは八〇年代初めからすでに動き始めており、その延長で今日の正常化につながった。ゴルバチョフ登場以後、その動きがはっきりしてきた。ゴルバチョフ外交はグローバルな視野で行われているが、同時に、社会主義諸国との関係をよくすることを明確にしており、なんとしても中国との関係修復を成し遂げたいと努力してきた。

中嶋　中ソ間のイデオロギー論争はなくなったものの、両国ともイデオロギー国家としての枠組みからは完全にはみ出てはいないと思う。十七日朝のゴルバチョフ演説を聞いても、イデオロギーをよりソフトにしようとしているとはいえ、社会主義、レーニン主義を生かそうとの大枠ははずしていない。今後の中ソ関係にある。

鹿取　社会主義国同士の協力という点に関してはソ連の方が熱心で、社会主義共同体という考えがぬぐい切れていない。中国は独立自主、非同盟で、この点の思い入れについては中ソ間で若干の差がある。中国の国内情勢が難しいところに来ているので、今後のことははっきりしないが……。

出席者

鹿取泰衛・国際交流基金理事長（発言順）
中嶋嶺雄・東京外語大教授（現代中国論）
鴨武彦・東京大学教授（国際関係論）

中国、重大な岐路

内政問題が進路を左右

中嶋氏

中嶋嶺雄
東外大教授

中嶋　まさに今後の内政問題が非常に重要だ。その展開によって、緩やかな同盟というか連携の方向に行くのか、あるいは従来のような西側との協調を含めた自主独立外交を進めるのか、重大な岐路に立っているといえる。開放政策を進めると、西側からの圧倒的な影響力によって社会主義から離脱しようとする傾向が出てくる。社会主義諸国は、国内から挑戦を受けており、今後、二十一世紀に向け、活性化というよりも、延命のための努力が必要となろう。その意味で、中ソの正常化は周辺のモンゴル、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、インドシナ諸国、アフガニスタンなども含めた社会主義諸国の間で、緩やかな連携が生まれてくるのではないか。

鹿取　中ソ間では政治改革の分野でも今後、経験の交流があるだろうが、改革、開放の面で、中国はソ連よりはるかに進んでいる。対外的に、中国がソ連と歩調を合わせるのは、国益を考慮して必要と判断した場合だけだろう。

——今回の中ソ和解は東西関係、米ソの枠組みにどのような影響を与えるだろうか。

鹿取　軍事超大国である米ソ関係が世界の枠組みの基軸であることに変わりはない。世界の平和、安全保障に両国関係は大きくかかわっている。しかし、この両超大国の経済困難が増していることは承知の通りだ。特にソ連は「総合国力」の概念を重視し始めている。このように、米ソ両超大国間の関係の色合いは従来とは違ったものとなってきているが、中国は自主独立で、もともと米ソとは距離をおいている。軍事対立を含まない従来からの米中関係は、ほとんど変化していない。いわゆる世界の三極構造に劇的な変化は生じないだろう。

中嶋　今回の首脳会談では国境線の確定やカンボジア問題など残された問題がある。これはゴルバチョフ・鄧会談では高度の哲学や世界情勢を語り合ったからで、シェワルナゼ・錢其琛両外相の会談や個別のいくつかの事務レベルの協議で詰めが行われよう。カンボジア問題や国境線確定の問題も含めて、大筋でかなりの合意ができたとみる。今後、ソ連はペレストロイカとアジア・太平洋時代にどう対応していくか、また中国は、当面、国内の民主化の問題にどう対応するか、経済開発のひずみをどう是正するかという問題に関心を向けていくことになろう。世界はいまアジア・太平洋、特に東アジアを中心として経済が動いている。今回もゴルバチョフ氏は、日本や東アジアの活力について、ウラジオストク演説の延長線で言及している。氏は欧州共同体（EC）の問題もクローズアップしている。EC自体は東欧も含めて社会主義国と積極的に交流しようとしている。一方では、ブロック化の動きがあり、同時にそれを内部から打破しようとする相互依存の体系がある。それは東アジアも同じだ。米国、カナダもそうだし、多極化というか〝多圏システム〟の方向に移行するところに中ソは追いつこうとしている。

ウラジオストク演説　ゴルバチョフ書記長が八六年七月二十八日、ソ連東部沿海州最南端のウラジオストクで行ったアジア・太平洋地域向けの演説。対中関係ではアフガニスタンからの六個連隊撤退、モンゴル駐留ソ連軍の「かなりの部分」の撤退方針などを打ち出し「ソ中善隣関係促進のため、あらゆるレベルで話し合いたい」と呼びかけた。中国が「三大障害」と指摘していた①カンボジア問題②アフガン問題③中ソ・中蒙国境のソ連軍——のうち②③の除去に部分的に応えたもの。これに対し鄧小平党中央顧問委主任（当時）は「ベトナム軍をカンボジアから撤退させるならゴルバチョフ書記長と会いたい」と言明、硬直していた中ソ関係が動き出した。

重要な日本の〝経済カード〟

鴨氏

鴨　武彦
東大教授

——少し古い話になるが、毛沢東・フルシチョフ会談が決裂した一九五九年当時も米ソ・デタントの最初の芽があり、それが中ソ対立の原因の一つとなった。ところが今度は米ソのデタントが中ソ新時代を生み出したが……。

中嶋　今回はまさに逆になった。五九年にはキャンプデービッドでの米ソ首脳会談があり、その後にフルシチョフが北京を訪れたが、共同声明も出なかった。そういう意味では国際情勢の流れが根本的に変わった。世界は今、戦後史を画するような本格的な〝脱冷戦時代〟を迎えている。今回、ゴルバチョフ書記長との会談で鄧小平氏は「水位が高まれば船も高くなる」と語っている。米ソの軍拡競争が拡大均衡の形で際限なく繰り広げられた時代を表現したものだ。しかし鄧氏は、ゴルバチョフ氏のウラジオストク演説を聞いて、今後は低いレベルでの軍事均衡が可能になるかもしれないと考えるようになった、と打ち明けている。

鹿取　中国は「米ソがまず核軍縮をすべきだ」と一貫して主張してきた。米ソだけが軍事超大国であるという事情は、中国にとって、安全の点からも、地域平和の点からも好ましくなかった。それが米ソがその方向に動き出したので中国も十分評価したといえる。その他、ゴルバチョフ氏のアプローチが非常に現実的であり、経済問題を重視したり、イデオロギーを重視しないという鄧小平氏の考えに近い点があった。ただ対外関係、特に中ソ関係、アジア地域の安全について、鄧小平氏が完全にソ連を信頼するというところまでいったのかどうか。鄧氏は「自分の目の黒いうちに」と中ソ関係を正常化したが、同時に、自国の安全について忘れているはずはないと思う。

鴨　中ソ関係の置かれた国際環境は五九年のころと基本的に違っている。一つ思い起こしたのは、五七年中ソは原爆技術供与に関する国防新技術協定を結んだが、その二年後ソ連によって破棄された。その結果、中国は自主的に核兵器を開発せざるを得なくなった。ソ連が今出してきている軍縮のアプローチとは基本的に異なっていた。中国の政策決定者たちのソ連観は大きく変化しているのではないか。

鴨　私はそれは「多中心化」という構造変化と考える。今回の首脳会談成功は、五〇年代のように中ソが同盟に戻ることを意味しない。米ソ関係の変化による東西の冷戦構造が変わる中での新しい中ソ関係正常化とみるべきだ。第二に、米ソの二極構造が変化する中で国際政治の民主化が起きてくる。つまり米ソが作り出した冷戦とは無関係の、新しい地域紛争の解決方法が出てくるということだ。国際的な安全保障という枠組みの中で見ると、欧州では一九八七年の中距離核戦力（INF）全廃条約調印で曲がりなりにも軍備の解体作業が進んでいるが、アジアではさまざまな提案はなされているものの構造的には変わっていない。それが今回、ゴルバチョフ書記長が極東地域の兵力十二万人削減などを打ち出してきたことで新しい状況が生まれつつある。欧州に遅れた形でアジアにも新しいルールが作れるかどうか、その入り口に立っている。

中嶋　日本はこれまで中ソ対立を前提に、米国との関係で安全保障を考えてきたが、中ソ正常化でかなり揺さぶりを受けることになろう。また日本は経済的に大きくなったが世界からかなり憎まれている。今後、日本は孤立するのではないか。気になるのはこの一、二年、中ソ和解の動きや米ソ緊張緩和の動きと共に日本がいよいよターゲットになりつつあるのではないかということだ。新ヤルタ体制という言葉がこのごろあちこちで言われているが、結局第二次大戦の敗戦国だった日本が戦勝国であるかのごとく経済力が大きくなった。これに対し中ソ両国とも何とか日本と交流したいと思っている半面、日本をこのまま放っておいてよいかという、日本に対するある種の潜在的な敵意というか脅威のようなものを感じている。これを日本としてどう受け止めていくか——まさに日本外交の正念場だ。

鹿取　今後、ソ連が対日外交を重視、日本を目標にしてくるということは確かにありうる。中国との問題が一応正常化で一段落したからだ。さらにゴルバチョフ氏にとって重要な外交テーマとしてヨーロッパの問題がある。近く西独を訪問する。また米国とも今後いろいろな問題がある。来年になってソ連の対日外交がすぐに動くかどうかは別にして、アジア・太平洋外交に関する限り中国の次に日本を重視していることはたしかだ。ゴルバチョフ氏の柔軟な「新思考外交」が動きつつあるにもかかわらず、日本に対してはまだその兆候がない。日本としても対ソ外交を活発化すべきだ。ただ、中ソ関係は正常化したが、これが今後どう発展するかは未知数だ。またアジア・太平洋、特に極東での一方的な軍縮案を出しているが、ソ連は極東の軍備を近代化しており、むしろ戦力は増強されている。だから数が若干減ったといって、それをそのまま評価していいかどうか。

鴨　日ソ関係を改善するためには、まず日米間の政策調整が必要だ。プッシュ米政権はソ連封じ込め政策を転換しようとしているが、日本は米国との調整を通して対ソ関係を改善していくことになるだろう。また、ソ連は極東兵力の削減を表明したが、海の軍拡は続いている。米ソが海洋面での軍備管理を進めることによって、日ソ関係も変わってくるはずだ。中ソの関係改善はいろんな地域への波及効果、同時並行的な変化（多中心化）を生む可能性があり、日ソ関係もボールがあちこちにぶつかるような形で変わっていくだろう。ただ北方領土の問題は、日本の対ソ交渉の切り札としての重みに欠ける。ソ連は日本の経済力、技術力に注目しており、日本の〝経済カード〟が、より重要になるだろう。

——安全保障問題を含めて今後の極東の展望は。

中嶋　ソ連は全欧安保の成功をアジアにも適用しようとしており、これは八六年のウラジオストク演説でも言っている。しかし当時は「平和攻勢にだまされる」という意見が強かった。今回はソ連もその教訓を学び、アジアには交渉や協議のシステムがまだないということがようやくわかり始めたのだろう。その意味で、今回のゴルバチョフ提案はきわめて具体的だ。これは日本への大きな挑戦でもある。ソ連の本格的な軍縮という挑戦を、日本がどう受け取るかが今後の課題だ。これはまだまだ多様で混とんとしているし、中国の近代化の前進も難しい状況だ。日本は従来の外交についての発想を転換する必要がある。日ソ関係はいえ、社会主義、レーニン主義を生かそうとの大枠ははずしていない。今後の中ソ関係にある。

鹿取　社会主義国同士の協力という点に関してはソ連の方が熱心で、社会主義共同体という考えがぬぐい切れていない。中国は独立自主、非同盟で、この点の思い入れについては中ソ間で若干の差がある。中国の国内情勢が難しいところに来ているので、今後のことははっきりしないが……。

16日、両国旗を背に会談するゴルバチョフ書記長（右）と鄧小平・中央軍事委主席＝共同